

論壇時評

中嶋 嶺雄

この息子さん、頭はよく、感あつた方だったな。ほくは材料をみな知ってるんだから「もつていなくちゃ」と言ふ。「と父親を苦笑させてる。これが息子の主張する

＜下＞

中曾根内閣成立後のわが国の内政・外交のテンポは、急にあつた。中曾根首相の訪韓による日韓関係の強化にたいしては、ソ連も中国も北朝鮮もほぼ同一の批判をおこなっており、今回の訪米による日米同盟関係の強化にたいしては、従来と違って、ソ連や中国がほぼ同一線上で批判するに及ばない。この意味では、中曾根の今日の意味があるのだといえよう。いざこれにせよ、中曾根政権の体制にかんしては、今後、中ソ双方は同じ立場から批判を展開しようとするべきである。

角影、政権への批判

▲内田健三ほか「83政治を見る目」など
屋山太郎「毒を以て毒を制す 中曾根人事の凄味」▼
『引導渡し内閣』と見る

文化



山下 大五郎・園

（諸君へ）である。屋山は、今回、自民党の総裁選で中曾根に票が集まったのは、「誰もか納得する年功序列を人事の基本とする」日本社会の伝統（基）に基いて、その点では中曾根が他の候補に抜き



政治学者や政治記者を動員しては、中曾根政権の本質は何か。今月の論壇各誌は、政治学者や政治記者を動員して様々な語らせている。内田健三・高橋通敏・岩見隆夫「83政治を見る目」（エコノミスト・一月十八日号）、石川真澄・岩見隆夫・田中豊蔵「中曾根政権の成立と政局」（現代の理論・一月号）、内田健三・松下宗之「野党は83政治決戦にどう挑む」（朝日ジャーナル・一月十四日号）などである。これらの議論

だといふ。このように、右のような一般の見方とまったく対照的な評価を加えている分析が屋山太郎の「毒を以て毒を制す」中曾根人事の凄味」の結果であり、「これほどした

出たといふ、中曾根は行財政改革、国際的信用の回復、政治倫理の確立という当面の三つの政治課題のうち、あえて前者のみを重視し、組織に際しては田中派を予想を上回って優遇したのだが、それは「二十五年

新執行部きめた 社会党への直言 一方、新しい執行部を決めた

沖繩出身の女性 沖繩県宮城村出身・赤嶺みとは、昭和十年、比嘉嘉喜とラジールで結婚した。

暗黒は今も続く あるアルゼンチンの日系人一家 佐伯 泰英

そのような中曾根政権登場直後の中川一郎の死は、多くのミステリーを残しながら、政界のみならず国民各層に大きな衝撃を与えた。この事件については、今後様々な話題を提供するだろうが、論壇各誌が事前に予測などできよつにもない。そうしたなかでたつ、ミニコミ誌の「カレント」（一月号、カレント出版委員会）が「永田町野限」というコラムで、「さ

年目の一九七五年四月二十五日深夜、ファンは自宅へ戻る路上で警察に逮捕された。その夜、十時半、カルメンは屋敷を歩く足音を聴いた。その時、ファンは外出していた。カルメンが中庭へのドアを開けると、暗闇から二人の男が降りてきた。彼らは手に短機関銃を持ち、戦闘服で身を固めていた。続いて表戸を破って別の男たちが乱入してきた。彼らは女だけの一家を縛りあげ、冷蔵庫を開けて勝手に飲み食いをはじめた。更に家財道具をぶちまけ、金目のものはすべてポケットに入れた。そして、帰って来たファンの頭から布袋をかぶせると連行して行った。その後ファンの消息はな

二年後、長女のカルメンが生まれ、その後三男二女をもつた。が、みとは男に縁の薄い女だった。長男、二男と次々に夭折し、栄喜も間もなく亡くなった。末の子の三男ファン・カルロスが唯一比嘉家に残された男であった。

「学問させたことが息子を殺したのですよ。オスカルも私たちと同じ洗濯屋をやらせればよかった。文盲ならこんな目にあわなかった」と嘆いたのは、オスカル大城の母郁だった。労働法専門の弁護士であったオスカルも、彼の法律事務所から白屋堂々と誘拐されていた。あとにイタリヤ系の妻と幼い二人の子供が残された。郁の嘆きは苦痛に満ちる。が、学問すること

ファンと同じように強制的に誘拐され、行方の知れなくなった者、アルゼンチン全体で約三万人。日系人失踪者の正確な数はまだ調査されていないが、私を知るかぎり失踪者十名、虐殺された者一名であった。

「学問させたことが息子を殺したのですよ。オスカルも私たちと同じ洗濯屋をやらせればよかった。文盲ならこんな目にあわなかった」と嘆いたのは、オスカル大城の母郁だった。労働法専門の弁護士であったオスカルも、彼の法律事務所から白屋堂々と誘拐されていた。あとにイタリヤ系の妻と幼い二人の子供が残された。郁の嘆きは苦痛に満ちる。が、学問すること



息子を連れ去られたショックで視力を失った母親みとさん（左端）と娘たち—筆者撮影

は、自分たちの子供にその職業を継がせよとほしなかった。高等教育を受けさせて、アルゼ

「学問させたことが息子を殺したのですよ。オスカルも私たちと同じ洗濯屋をやらせればよかった。文盲ならこんな目にあわなかった」と嘆いたのは、オスカル大城の母郁だった。労働法専門の弁護士であったオスカルも、彼の法律事務所から白屋堂々と誘拐されていた。あとにイタリヤ系の妻と幼い二人の子供が残された。郁の嘆きは苦痛に満ちる。が、学問すること

「学問させたことが息子を殺したのですよ。オスカルも私たちと同じ洗濯屋をやらせればよかった。文盲ならこんな目にあわなかった」と嘆いたのは、オスカル大城の母郁だった。労働法専門の弁護士であったオスカルも、彼の法律事務所から白屋堂々と誘拐されていた。あとにイタリヤ系の妻と幼い二人の子供が残された。郁の嘆きは苦痛に満ちる。が、学問すること

「学問させたことが息子を殺したのですよ。オスカルも私たちと同じ洗濯屋をやらせればよかった。文盲ならこんな目にあわなかった」と嘆いたのは、オスカル大城の母郁だった。労働法専門の弁護士であったオスカルも、彼の法律事務所から白屋堂々と誘拐されていた。あとにイタリヤ系の妻と幼い二人の子供が残された。郁の嘆きは苦痛に満ちる。が、学問すること

「学問させたことが息子を殺したのですよ。オスカルも私たちと同じ洗濯屋をやらせればよかった。文盲ならこんな目にあわなかった」と嘆いたのは、オスカル大城の母郁だった。労働法専門の弁護士であったオスカルも、彼の法律事務所から白屋堂々と誘拐されていた。あとにイタリヤ系の妻と幼い二人の子供が残された。郁の嘆きは苦痛に満ちる。が、学問すること